

企業から見た
インターンシップ

01

ロレアルグループ

就職活動スケジュールの変更により、学生・企業ともにインターンシップへの注目度が高まっているが、ロレアルグループは以前からインターンシップに力を入れている企業の一つだ。世界最大の化粧品メーカーであるロレアルの様々な部門に配属され、1.5カ月にわたって課題に取り組むという同社のインターンシップ。“実践”にこだわるインターンシップに込められたロレアルの想いとは。日本ロレアル株式会社 人事本部 新卒採用担当 深津由衣氏に話を聞いた。

世界最大の化粧品メーカーの様々な部門で
インターンシップを実施

世界130カ国で「メイベリン ニューヨーク」「シエウ ウエムラ」など主要32ブランドを展開する世界最大の化粧品メーカー『ロレアル』。同社の日本人である日本ロレアルは製品の生産を手掛ける株式会社コスメロールとともに、アジア最重要拠点として製品開発・生産・物流を担っている。そのロレアルが、日本国内の様々な部

門で例年実施しているサマーインターンシップは、いずれも1・5カ月程度と長期のプログラムとなっている。理系との親和性が高いのはロレアルグループで製品の生産を担当しているコスメロールのマニユファクチュアリング部門（生産管理／品質管理など）だが、日本ロレアルのマーケティング、サプライチェーン、ファイナンス部門などでも理系学生を歓迎しているという。その年によって受け入れ部門は多少異なるが、いずれも1・5カ月にわたって各部門が抱えている課題

長期にわたって実務に取り組むことで 見えてくる“自分の可能性”



の解決に挑み、最終日にマネジメントメンバーに対してプレゼンテーションを行う構成となっている。長期にわたるインターンシップは実施企業にとっても負担は少なくないはずだが、なぜロレアルは積極的に学生を受け入れているのか、深津氏はその理由を次

のように話す。

「インターンシップを通じて学生の皆さんに本当の意味での『実務』を体験し、仕事理解を深めてほしいと私たちは考えています。1カ月以上にわたってビジネスの現場で働けば、仕事の山や谷にぶつかることもあるでしょう。そういった壁

を乗り越える経験をしてほしいのです。そのためには、一定の期間が不可欠。プログラムは楽ではありませんが、やりがいや学べるものは大きいはずですよ」

ビジネス現場における本物の課題に挑む

同社のプログラムで特徴的なのは、インターン生に与えられる課題が、インターンシップ用に作られたものではなく、各職場が実際のビジネスで向き合っている本物の課題であるということ。マニユファクチュアリング部門における課題を例に挙げると、工場での生産ラインの効率化や品質管理のプロセス改善といった業務改善に関するテーマなどがある。さらに、インターン生の取り組んだ改善提案が実際のプロジェクトへの貢献につながったり、様々な形で世の中に出たりすることも珍しくないという。

「ビジネス水準の課題解決に挑むわけですから、そう簡単にいかないことがほとんどです。最初は戸惑い、悩み込んでしまうインターン生も少なくありません。それでも、指導役のメンターや周囲の社員の力を借りながら試行錯誤し、壁を乗り越え、ほとんどの学生が最終日までにアウトプットにたどり着いています。失敗してもいいので、期間中はいろんなこ

とに挑戦してほしいですね。失敗を通じて得られるものもありますし、失敗を繰り返すことで大きな成功につながります。一皮むけるんだという覚悟を持ってインターンシップに臨んでほしいですね」

壁にぶつかり、乗り越えるという経験を通じて得られる収穫は、仕事理解。だけではない。自身を大きく成長させるチャンスでもあるのだ。さらに、自分という人間を理解するうえでインターンシップは貴重な機会であると深津氏は続ける。

「厳しい環境で壁にぶつかった時こそ、自分の本当の強みや弱み、価値観が明らかになります。実体験がなければ、本当に大切にすべきものが、仕事内容なのか、社風なのか、お金なのか、判断するのは難しいかもしれません。実際に働くこと

で、その仮説を確信に変えることができるのではないのでしょうか」

理系に期待しているのは分析力や論理性

ここまでの話を聞いて、「このプログラムに参加できるのは、特別なスキルを持つている学生なのではないか」と思われた読者もいるかもしれないが、インターンシップの選考において特別な知識やスキルは求めていないと深津氏は話す。

「外資系企業なので英語はできるに越したことはないですが、絶対条件ではありません。各コースとも大学の専攻で限定したり、実務に関する専門知識を求めたりといったことはありません。理系学生に期待しているのは、データを分析する力や、最適解を導き出せる論理性です。

プラスで付け加えるとすれば、主体性を持って行動し、他人と協力して何かを成し遂げた経験があればいいですね。

化粧品に興味がある女性はもちろんですが、ロレアルは男子学生からのエントリーも歓迎しています。新しい視点で私たちのビジネスに新たな価値を生み出してくれることを、社員一同期待しています！」

化粧品と聞くと、縁遠いと感じる理系男子が多いかもしれないが、世界で戦える商材としての魅力は決して小さくない。特に日本の化粧品市場は世界第2位の規模を誇る巨大かつ競争の激しいマーケット。本インターンシップを通じて競争に勝ち残るための事業戦略やスピード感を感じてみてはいかがだろうか。

理系学生へのメッセージ



“

私も学生時代に当社のインターンシップに参加したのですが、最初はわからない事ばかりですし、仮説通りにいかないことも多く、非常に戸惑いました。それでも何とか乗り切れたのは「ビジネスでは完璧でなくてもいいので、いかに立て直していくかが重要」と考えを切り替えたからです。

やってみなければわからないことはあるので、まずは挑戦してみてください。一歩踏み出せば、そこから自分の将来につながっていくはずですよ！

”

日本ロレアル株式会社
人事本部 新卒採用担当
深津 由衣

企業から見た
インターンシップ

02

日本総合研究所

理系の強みである論理的思考力などを活かし、付加価値の高い仕事をしたいと思う学生は多い一方、そのようなビジネスは実態が見えにくいのも事実。金融業界におけるIT戦略立案は、その最たるもののひとつと言えるだろう。実践型の内容に特化した日本総合研究所のインターンシップは、金融サービスの内実に触れたり、企業の事業戦略に挑戦したりするなど、リアルなビジネスの空気を感じることができる貴重なプログラムとなっている。人材育成部の次長を務める國澤勇人氏に、同社のインターンシップについて話を聞いた。



リアルなビジネスの空気に触れ、 意志を持って考え抜いてほしい

日常生活から見えにくい
ビジネスの実態を知る

三井住友フィナンシャルグループの総合情報サービス企業である日本総合研究所（日本総研）。ITソリューション事業では金融ビジネスの根幹を支えるIT戦

略の立案等を行い、コンサルティング・シンクタンク事業では「次世代の国づくり」をスローガンに掲げ、活力ある日本的な事業・業務内容をイメージできる学生は少ないのではないだろうか。そのビジネスを実際に体験して知るこ

とができるのが日本総研のインターンシップだ。「IT戦略コース」と「戦略コンサルティングコース」の2コースが用意されており、どちらも5日間のプログラムとなっている。「IT戦略コース」はグローバル金融ビジネスのIT化の構想や全体マネジメント策定といった金融グループのIT戦略を企画立案する内容となっており、「経営コンサルティングコース」は経営戦略・事業戦略といった実践的なコンサルティング業務の一連を体験する内容になっている。

実務に近いプロジェクト形式で
挑むプログラム

「リアルなビジネスとの近さ。それが日本総研のインターンシップの大きな特徴です。2コースとも実務に近いプロジェクト形式で進めていきます」そう語るのは人材育成部の國澤氏。例えば「IT戦略コース」ではIT戦略の立案からステークホルダーとの調整、プロジェクト計画の策定までを行い、「戦略コンサルティングコース」では仮想クライアン

トに対する戦略の策定から、プレゼンまで行う。その内容は実際のビジネスにおける実務内容と遜色なく、ミーティングの進行から、資料の作成方法に至るまで、細かな点まで現場と同じ形で進められるそう。事前準備からアウトプットまで細部にわたってリアルにこだわる同社のインターンシップ。ここまでリアルティに徹底する理由とは。

「インターンシップは会社説明会とは違います。ビジネスの場において必要なこと、仕事と社会との関わりを知ってもらいたい。それは企業人としての務めだと考えています」このプログラムを通じて日本総研という会社を知るだけでなく、ビジネスの本質に迫る経験を積み、知見を深めることができるだろう。

解を選択するためには、
自分の意志が欠かせない

当然ながら、実際のビジネスに触れた経験のある学生は少ない。だからこそ実践に近い内容であれば、プロジェクトを上手く進められないことも多いのではないだろうか。5日間という短い期間で成長は可能なのだろうか。

「もちろん最初は難しいですね。前半の数日間で何度も厳しいフィードバックを受けたり、提出した内容を突き返された

り、といったことは当たり前。それでも諦めなければ、5日間でも大きく成長できるものです。5日間という期間でビジネスにおいて通用するレベルのアウトプットを生み出すために参加者に必要なのは、何よりも自分たちの「WILL(意志)」を持つことだと当社は考えています。ビジネスにおいて最適解は一つとは限りません。それが研究とビジネスとの大きな違いです。答えが一つでない状況で選択を行うために、最も重要なのは自分の「意志」。諦めずに最適解を考え続けるという強い意志がビジネスの場で必要となる決定力につながるのです」

論理的な思考力と本質を追求する姿勢は理系学生が持つ特質であり、それらは実際のビジネスでも大いに役立つものがある。しかし、研究とビジネスでは「正解が一つではない」という決定的な違いが存在するため、國澤氏は「分析オタクになってはいけない」と警鐘を鳴らす。ビジネスで意思決定を行う際、判断の補助としてフレームワークなどのテクニクは存在するが、同社のインターンシップではそういった技術はあえて教えない。フレームワークや分析ありきではなく、自分の頭で極限まで最適解を考え、それを論理立てて形にすることがビジネスにおいて何より重要であると同社は考えているからだ。

ビジネスの面白さと醍醐味を実感するために、リアルにこだわった同社の実践型インターンシップは格好のチャンスと言えるが、実際のビジネスに近いということは、それだけ簡単なプログラムではないということもある。しかし、ビジネスの現場の空気に触れることは、自分の視野を広げる上で大きな糧になるはずだ。

「諦めないでほしい、考えるという行為を一生懸命にやってほしい」と國澤氏は激励のメッセージを送る。「研究と違いビジネスは、今、動いている社会を作っていくというところに意義と面白さがあります。自分の力で、世の中をどうやって変えていきたいのか。ぜひあなた自身の「WILL(意志)」を持って挑んでください」

理系学生へのメッセージ



“

学生の方には可能性を広く持ってほしいと思います。そのためには思い込みや先入観をなくすことが大切。「理系だから自分と金融は関係ない」「コンサルは文系職種」といった思い込みを持っている理系学生と会うことがあります。学問の生かし方にはいろいろな道があります。そして可能性を広げるのであれば、できるだけ早い方がよい。インターンシップは間違いなく将来の選択肢が広がるものなので、ぜひ幅広く興味を持って挑戦してほしいですね。

”

株式会社 日本総合研究所
開発推進部門 人材育成部 次長
國澤 勇人

企業から見た
インターンシップ

03

三井住友海上火災保険

就職活動におけるアドバイスに「先入観にとらわれないこと」を挙げる理系出身者は多い。思い込みを捨てることで、新たな選択肢が見えてくることもあるからだ。例えば、金融業界。理系とは縁遠いと考えている読者もいるかもしれないが、実際に金融業界で活躍している理系人材は珍しくない。インターンシップは、そんな先入観を取り払う良い機会。「損害保険業界では、理系の素養が存分に活かされます」そう語る三井住友海上火災保険株式会社 人事部 採用チーム 課長代理 宗玄清秀氏に、同社のインターンシップについて話を聞いた。



「社会人基礎力」を身に付け、
5日間で大きく視野を広げてほしい

理系の素養が存分に活かせる、
損害保険業界

「損害保険」というと、自動車保険や火災保険、海外旅行保険といったイメージが強いかもしれない。もちろん、こうした身近なリスクを対象とするのも、損害保険の一面。しかし、そこで理解を止めてしまっただけではもったいない。

「損害保険会社には、企業の挑戦やテクノロジーの発展を支える面もあります。たとえば宇宙開発や再生医療といった先端技術の進歩、そして企業の海外進出や新規事業創出…。産業や世の中が動けば、これまでにない新たなリスクが生じます。損害保険会社はこのようなりスクをしつかりと洗い出し、最適なリスクマネジメントを提案しています。こうした提案内容は戦略的かつロジカルに組み立てていく必要があります。理系の強みを存分に発揮できます。また、技術や産業全体の発展に寄与することができることは、理系人材にとって大きな手応えがあるはず」

株式会社 人事部 採用チーム 課長代理 宗玄清秀氏。外から見るだけではなかなか分からない損害保険のビジネスについて理解を深めてもらうことが、同社のインターンシップを実施する目的の一つ。特に理系人材が活躍できるフィールドが広がっていることを実感してほしいという。

社会人として必要な力が分かる、
身に付く5日間

例年、同社が夏に実施しているインターンシップには、2つのコースがある。アクチュアリーの仕事に特化した「アクチュアリーインターンシップ」と、損害保険業界の仕事を実践的に理解できる「MS-インターンシップ」だ。いずれもグループワークを中心に行い、損害保険ビジネスの基礎知識を学ぶところからスタートし、最終的には新ビジネスを生み出すまでのプロセスを体験できる濃密な5日間となっている。

特にMS-インターンシップでは、この先どんな仕事に就く上でも欠かせない

「社会人基礎力」を磨くことに焦点を当てている。「社会人基礎力」とは、経済産業省が提唱している「前に踏み出す力」「考え抜く力」「チームで働く力」の3つの能力だ。

「まず1日目は、これらをテーマにしたゲーム形式の課題を与えます。グループで協力して制限時間内のクリアを目指しますが、最初からクリアできるグループはほとんどありません。学生さんは失敗を恐れるがために一步を踏み出せないことが多いですが、ビジネスはそれでは進みません。トライアンドエラーを経て100%を目指していく。その繰り返しですが、仕事をするこゝだと感じてほしいですね」

「産業の発展を支える」
損保ビジネスの神髄を体感

2日目からは、損害保険の実業務に即した課題に取り組んでいく。例えば「リスクマネジメント」では、顧客の事業にひそむリスクの洗い出し、リスク分布図の作成、それに対する提案まで行う。まさに企業や産業の発展に貢献できる分野であり、理系が得意とする論理的思考力が発揮できるワークだ。「金融知識がないことを不安に思われる方もいらっしゃると思いますが、基礎から実践を通して身に付け

ていきますから、金融知識は不問。意欲があれば、まっさらな状態で来ていただいて問題ありません」

また、プレゼンテーションや提案のロールプレイも複数回にわたって行う。

これも、最初から上手くできる学生はほとんどいない。内容の完成度はもちろん、声量や姿勢といった細かなところまで改善点だらけだ。しかしフィードバックを繰り返すことで、見違えるほど洗練されていくという。ビジネスの最前線で活躍する社会人からのアドバイスは、学生にとって貴重だろう。「社員との懇談会も行います。仕事のやりがいや、どんな働き方をしているのかなど、生の声を聞くチャンスですよ」

そして5日間の集大成が、新ビジネスのプレゼンテーション大会だ。与えられ

たテーマにもとづき、グループでビジネス戦略を練り、自由な発想で提案を行う。「夜遅くまでプレゼン資料を作りこむグループもあるなど、初日とは明らかに取り組む姿勢が異なります」

漠然とした「社会人」のイメージが、
明確に

同社のインターンシップは、参加した学生から非常に評価が高い。「仕事」に対して具体的なイメージを得られ、今後のキャリア形成に大きく役立った」「グループワークを通じて多様な考え方に触れられた。また、集団の中で自らの役割を意識し、全うすることの大切さを学んだ」「失敗を恐れず、トライアンドエラーを繰り返して100%を目指す。この考え方に出会えたことで、インターンシッ

プ後の就職活動も積極的になれた」といった声が挙がっている。わずか5日間の自分とは比較にならないほど、大きな成長が実感できるはずだ。

「それまで接点のなかった人たちと協力して難解な課題に挑み、トライアンドエラーを繰り返して課題をクリアし、成長していく。なんて大変なことだろうと思われるかもしれませんが。しかし社会で働くこととは、その連続です。早くから働くことに向き合うこの機会を、ぜひ大きな成長の糧にしてくださいと考えています」

理系学生へのメッセージ



“

理系学生の中には、「授業や研究が忙しく大学の関係者との接点はあっても、社会人との接点がほとんどない」という人も多いと思います。しかし、将来社会に出ることを考えているのなら、早いうちにインターンシップを経験した方がいいと思います。特に当社のプログラムは第一線で働くプロフェSSIONナルたちと直接話す機会がありますし、グループワークを通して「働くとはこういうことか!」と新たな気付きも多く得られると思いますよ。

”

三井住友海上火災保険株式会社
人事部 採用チーム 課長代理
宗玄 清秀